

大阪 ■ ■

No.30 2004. 10.30.

大阪哲学学校運営委員会 Copyright©, 2004

哲学学校

【郵便振替】 01170-1-81313

【E-mail】 contact@oisp.jp

【Home Page】 <http://oisp.jp/>

【Net Forum】 準備中

【代表者】 山本 晴義 (校長)

【発行者】 平等 文博 (運営委員長)

【編集者】 平等 文博

【連絡先】

■ ■ 通信

辻元清美さんの講演を聴いて

——つれづれの思いのままに

松尾 猛省 (会員)

辻元清美さんの講演会ということで、久しぶりに会場におもむいた。

その知らせを受けたとき、哲学学校以外の人々がおおぜい参加して会場も埋め尽くされるのではないかと思っていたが、各新聞社宛の恒例の案内が、いずれも掲載されずに、十分なPRもいきわたらず、結果的には従来どおりの哲学学校講座の枠内の二十数名に始終することになった。それにはどんなわけがあるのか、それでも会場には普段からみれば倍近くの参加を見た。

それはそれなりに、講演者自身も少人数のほうが、膝突き合わせての意見交換なりも可能でやり良い面も、また中味の濃いものになるやもとの考えもとの講演となった。まあ、そんなことで、各々自己紹介の後、じかの質問や、意見交流へと会場も盛り上がった。

当初、哲学というところのソクラテスや雲の上のイメージが浮かんで仰天、そんなむずかしいところへのしり込みも、平等運営委員長からの主旨説明で、そんなんやあらへん、まあ、いけば市民が主体のみじかな生活現場からの声や

意見をすいあげ、文化活動を主体にこの話でようやく納得。そのはざまに、哲学学校、平等さんの氏名に、自由、平等、平和その理念、その語呂合わせ、表裏のごとしと、さすがわさびの利いた頓知は、まさにピースポートから鍛え上げた平和運動の闘士のウイットかなと思った。

日本の場合、その固有名詞、抽象名詞そのものが、氏名になったりして、ややこしく、かつ、当の本人には甚だ迷惑な時もある。私の名もご覧のとおりで、猛省、名は体を顯すといえ、私はいつも猛反省ばかりしていなくてはならず、わたしの名が新聞の社説などの見出しに、そのまま「〇〇—猛省せよ」などの活字を見るのはあまり気分のいいものではない。氏名=固有名詞の誠にたわいなさか、親のつけた氏名、その命名の謂れを聞かされると無碍にも出来ないところもある。

さて、濃紺のスーツとパンタロン姿の辻元氏、TVの国会でもおなじみの姿が、いま、労働センターの室内のひとたちの目の前に、あの衝撃、その過失のトンネルをくぐり、法の裁きも終え

て、いつもの晴朗で、あのみなれた眼差しで語っていた。

だが、ときに、わたしの脳裏にちらつくあの、総理、総理のことばや、疑惑の総合商社、デパートやないと鈴木宗男に食って掛かっていた闘魂あふれる国会の女闘志が、まさかのそれが発覚した時の動顔、あのときはそれを一旦は否定、土井さんをほっとさせていたTVのあの一場面が私の脳裏にぬぐえず、それが一時しのぎの抗弁に過ぎなかったこと、なんとも残念の思いものころ。

いつもながらに、国民の側から見ていて、疑惑がその政治家にふりかかったとき、それをあからさまに認めるぐらいの度胸の据わった怪傑男児なみのいさぎよさ、社会改革の闘志であればそのぐらいの太っ腹で対処して欲しかった思うのは私だけであつたらうか。

その秘書給与問題自身、国民の側から見れば、外務省の機密費に似て、それが馬の資金に化けるかのごとき曖昧模糊としたもので、いまは出る杭は打たれる式でのありさま、槍玉にあがらぬものは隠れ蓑、それはそれで何事もなく、ことが済むという今のあり方に、これでいいのかと思ひ、すべての議員がきっちりやっているのかと、疑う国民も多くいるのではないかと思う。その意味では辻元さんは、まことに不運、体のいい犠牲者という思ひはぬぐえない。

「政治と金」の問題が今、予算委員会で審議中だが、日歯連の一億円受領に「記憶がない」といって、子供だましのような戯れセリフが白昼堂々とまかり通り、その火中の人たちは対岸の火事よろしく頬被りの何食わぬ顔で、まるでかわりのない政界から引退の村岡氏にその濡れ衣のお鉢が廻り、氏は身の潔白の証言には、証人喚問さえ辞さないといきまく。

いったいこれはどうなってんのかと、こんな子供騙しのことが通るとは。これではまるで、ミステリー小説？ 名探偵家、あの金田一氏ならこれをどう読み解くのか。

珍現象といえば従来なら、本件は野党こそって攻勢というところだが、先日の予算委員会では追求するのは民主党のみ、共産、社民はその声すら上げないのもどうということなのか。

二大政党化傾向の影に、もう共闘の時代は終焉し、別々の行動とでもいうのか。なんとも割りきれぬ思ひ。だが、政治と金の問題は政党政治の枠を超えて、依然として厚い壁として残るのだが…

「日本の社会をどう変えるか」とのメインテーマのまえに、最近のプロ野球界や、ダイエー問題についてどう思うかと会場の意見を聞いたあと、なにか、地殻変動の起きている現象は、従来の巨人(たかが選手ごときの)一極傾向からIT業界のプロ野球界の参入は球界に明るい材料をとの傾向に、時代はまさに地殻変動のように、古い壁が徐々に剥れていきつつあるのか。その延長線上との思ひにあるのがまた、政局でもあるのだが、いろいろと、ダボス会議の話から、イラク、北朝鮮、人権、平和、地球環境の話などから自由と平等、平和へを基点にその目指す方向を示唆、この人にはのんびりと遊泳の時もないかの日々、夏の参院選には一万ながしかの差で惜しくも返り咲けなかったが、いまだ若いみそら、今の時間を天与の充電時期とし、あせらずにカムバックを果たしてもらいたい。国民にしても、あの切り込み隊長の鋭い追及と攻勢は忘れていない。その数字が七十一万票の期待と再起へのステップ、明かしを見た。その声援に応え、次回のさらなる奮闘を、またの機会に、本会議場の熱弁をも期する思ひである。

「哲学」とかかわって（1）

五福 久雄（会員）

私は今日本大学通信教育の哲学科の同窓会が主催する「哲学カフェ」というHPの管理人をやっています。今年3月に卒業した私たちは哲学科に同窓会が存在しないことに驚き、数人が発起人となって卒業と同時にOB会とその公式HPである「哲学カフェ」を立ち上げました。そしてやはり同じ思いであった哲学科教授たちの賛同と協力を得、現在会員数40名と特別会員（教授陣）10名ほどでこの活動をしています。会費は取らず活動の為に費用はすべてはボランティアで賄うため、過去の卒業生、何しろ膨大な数に上りますので、いまだに案内を出せていません。同総会である限り、すべての卒業生を対象にという意見もあるのですが、私たちは何よりもまず、同じ大学の哲学科出身者同士の間としての単なる同窓会ではなく、「哲学」と一生かかわっていききたい、何らかの「哲学」の実践を生活の場で試してみたい、ひいては社会改革につなげていききたいという思い、それが発端となつてのOB会の結成でしたから、いわゆる同窓会とは少し趣旨が違っており、「哲学活動」をメインテーマとする組織、を作る為に、敢えて会費を取らずにスタートしたわけです。勿論先輩たちに門戸を閉ざしているというわけではありませんし、今現在、日大通信哲学と名のつく同総会らしきものは私たちの会しかないわけですから、自動的に毎年何名かの卒業者の入会が見込まれますし、将来的にこの会がもっと大規模に発展することもあるわけで、その時にはいわゆる同総会的な意味合いがもっと強くなるということも予想されますが、基本的に私達創生メンバーは2年間でこの会の基礎作りをして、あとはほかの人にゆだねたいと、そして組織自

体のメインテーマが流動的であることは当然のことだと思っているわけです。

「哲学カフェ」の名前はパリを起点とし、いまやフランス全土の100余りのカフェに拡大して、一種の社会現象になっているカフェ・フィロという集いから拝借しました。

「フィロ」はフィロソフィーのフィロで『哲学カフェ』となるわけです。本家「哲学カフェ」はニーチェを研究する哲学者で「哲学相談所」（キャビネ）をパリの街なか開設したマルク・ソテーが始まりです。彼がバスチユ広場にあるカフェ・デ・ファールで毎日曜日カフェに集う一般の人々を相手に哲学談義を交わしたのが口コミで広がり、またメディアで紹介されてこのカフェに大勢の人が集まるようになったのです。どんな感じかといいますと、さまざまな人たちが三々五々集まってくる。そこに進行役のマルク・ソテーがラフなジーンズ姿なんかで登場して、その場でテーマを決め進行役を勤める。すべてが自由でまるでジャムセッションのような哲学のディスカッション。とまるで見てきたかのようなことを言いますが、そんな雰囲気らしいです。残念ながらマルク・ソテーは52歳の若さでなくなりましたが、彼をお手本に、私の周りにもソクラテスの街角の対話が復活すればよいと考えています。日本でも鷲田清一氏が『臨床哲学』という試みをなさっていることは皆さんよくご存知だと思います。

哲学活動？に熱中する余り妻から、ちなみに私は趣味の欄に妻と書くほどの愛妻家なのですが、「やっと卒業したと思ったのに、まだそんなことやってんの(怒)」としかられます。家庭サービスが疎かになるほどこの活動には手間隙がか

かるのですが、これが生甲斐の一つなのでから大目に見て欲しいと思いますし、またこの妻なればこそソクラテスの気持ちも理解できるといふもので、この点からも私は哲学の活動に向いているのではないかと、できれば生涯をとおして、哲学と関わりつづけたいものだと思っています。

※五福さんが管理人をしておられる「哲学カフェ」のURLは、<http://hp1.cyberstation.ne.jp/tetsugaku/>です。ぜひ一度アクセスしてご覧下さい。(編集部)

夏合宿の報告

木村 倫幸 (参与)

夏恒例の合宿が、8月28日から29日まで開催されました。

今年の開催地は、京都市のど真ん中、京阪三条から徒歩10分の交通至便なホテル「ウオジ苑」でした。季報『唯物論研究』刊行会・大阪唯物論研究会哲学部会との共催で、夏休みの終りの忙しい時期にもかかわらず、遠く埼玉、名古屋や九州から17名の皆さんが参加されました。その模様を簡単にお知らせします。

第1日目は研究発表で、まず大藪龍介さんから「上からのブルジョア革命と明治維新」と題する報告がありました。ここでは明治維新の諸特質を「上からの革命」と特徴付けて、プロイセン＝ドイツの革命との比較、「革命期」の設定、複合的發展の見地等によって明治維新史研究の新境地を開いていく見解が述べられました。

続いて、中川健一さんから「最近のマスコミ状況」という報告が行なわれました。9.11以降の米国など海外マスコミの状況、戦争報道での情報統制・操作、FOX効果、アルジャジーラなど多彩な話題が提供され、国内での有事法制、メディア規制に対して民衆のためのメディアの重要性が強調されました。

当日夕食後は市内探訪ということで、新撰組で有名になった池田屋跡や三条、鴨川、白川等へと足を伸ばしました。その後の交流会はアルコール

ルも入って、みなさんの近況報告を中心に、尊皇攘夷や開国近代化や倒幕から吉良邸討ち入りまで大いに議論が盛り上がりました。

2日目は、7:00に起床。伊元勇さんの指導のもと、一昨年からスタートした早朝ヨーガ教室(クリヤー・ハタ・ヨーガ)が開催されました。その後午前中は、中村徹さんの報告「日の丸・こころのノート・教育基本法改正」がありました。『心のノート』は、文部科学省が全国の小中学生1200万人に一齐配布された「道徳教育」の副読本で、これと「日の丸・君が代」「教育基本法『改正』」との警戒を要する傾向が指摘されました。

以上の合宿終了後、四条烏丸の中村良子さんのギャラリーにおじゃまをし、町屋の情緒を堪能、解散となりました。

このように今年の2日間の合宿は、久しぶりにお会いした懐かしいお顔とさまざまな議論を残して、あっという間に終了してしまいました。また合宿でいろいろとお世話をしていただいた参加者の皆さんに心から感謝する次第です。来年の合宿にも多くみなさんが参加されることを心待ちにしております。(2004. 10. 8.)

近刊『梅原猛—その哀しみと夢—』のねらい

やすい ゆたか（会員）

ここ数年間、念願にしてきた『(仮題) 評伝 梅原猛—その哀しみと夢—』がいよいよ、来春 ミネルヴァ書房から出版される段取りになってきた。この場を借りて、本書にこめた私のねらいを明らかにして会員諸氏のご期待を乞いたい。

哀しみの涙の海を胸に秘め

命の愛しさ語る人かな

〈怨霊が歴史を動かした。〉一九七二年に梅原猛の『隠された十字架—法隆寺論—』（新潮社刊）がでるまでは考えられなかったことだ。私は闇のパトスで歴史を説明しようとする試みに、気味悪さを感じた。その翌年柿本人麻呂まで怨霊だったという『水底の歌—柿本人麻呂論—』（新潮社）である。私は幻想ではないかと相手にしなかった。

一九八〇年代になって買った講談社文庫の『美と宗教の発見』に衝撃を受けた。鈴木大拙、和辻哲郎、柳宗悦、丸山真男という日本文化論の権威を「宗教的痴呆」と一刀両断にしているのである。うむ、生意気な、でもこれは面白そうだ。確かに梅原のいう通りである。鈴木大拙は禅宗しか知らない、和辻は仏教を思想としては理解しようせず、天皇教を引き摺っている。柳は木喰像を木喰の信仰である真言阿字観抜きに語っている。丸山は仏教文献に内在することなく、日本文化タコツボ論をぶち上げている。どれも戦前の天皇教の内圧のもとで日本における仏教思想の伝統をきちんと評価できていないという意味で「宗教的痴呆」に陥っているのだ。私は当時廣松渉批判からさらにマルクスのフェティシズム論批判へと突き進んでいた頃だった。

理論を志すなら、もっとも根源的な問題に取り組むべきであり、時代の権威になっている思想家と命がけで格闘すべきであるというのが、私の身上だった。だから『美と宗教の発見』の読書は実に爽快であった。

梅原猛には『学問のすすめ』（一九七九年、佼成出版社）という自伝文学の名著がある。彼の誕生の秘密などにも心を打たれたが、初めて読んだときは「権威にかみつくライオン」として自分を形容しているところが最も私の胸をときめかし、勇気を与えられた。かくして梅原猛に対する偏見を払拭して読んだ『隠された十字架』や『水底の歌』は私にとって、これこそ哲学だと考えているものにぴったりだったのである。哲学を有害無用だとして反哲学を唱える人たちは、哲学を思考に枠を嵌めて硬直化させる営みと感じているようだ。だが硬直化した既成の哲学を根底から問い直して新しい地平を切り拓く営みこそがより哲学の名に相応しいのではないか。ソクラテスは既成の哲学者たちの独断と思ひこみに疑問を投げかけ、「無知の知」に戻って一から考え直すことを哲学（フィロソフィー）と考えていただろうから。

法隆寺という聖徳太子の遺徳を偲ぶために再建されたとされている寺が、実は太子の怨霊を鎮魂し、封じ込めるための寺だったというのである。というよりは不吉なことが起る度に、太子の怨霊が祟ったと藤原氏の方が受け止めたのである。その結果、元々は神道勢力だった藤原氏が太子の信仰である仏教で太子の怨霊を鎮めようとして、仏教の保護者となり法隆寺再建に尽力したのである。勝者が敗者の怨霊を恐れて敗者の仏教国造りという夢を実現するという見

事な逆転の弁証法である。

柿本人麻呂は高市皇子への挽歌が持統天皇や藤原不比等たちの逆鱗に触れ、スキャンダルを口実に流刑にされ、ついには水刑で殺されてしまったという。反藤原勢力によって反藤原氏の精神的支柱にすべく怨霊として祭り上げられ、柿本人麻呂歌集を中心に『万葉集』の編纂が進められる。その中心だった大伴家持が怨霊の代表格早良皇太子の東宮大夫だった。それで家持も怨霊とされた。それを鎮魂するために、平城天皇によって『万葉集』が最終的に勅撰化されたということである。そのことで和歌が文化の華となった。ここでも勝者が敗者の怨霊を恐れて、その夢を実現させるという逆転の弁証法がある。怨霊が歴史を動かすという新しい歴史観である。

理想を実現するためには権力を握らなければならない。権力を握るためには陰謀が必要だ。理想に生きる文化人はその犠牲になる。その時、権力者は自分が葬った文化人の崇りを懼れる。これは良心の証しではないのか。日本文化の伝統に怨霊信仰があるということ鮮やかに実証した梅原は、民族の良心を見つけ出してくれたのである。日本文化の根底に怨念や哀しみがあり、怨霊への恐れとその裏返してしての良心があるのである。これほどまでに根源的に日本文化を捉え返した営みはあっただろうか、これこそ私の求めている哲学の姿なのではあるまいか、私は魂の震えを覚えたのである。

私は怨霊に対して特に研ぎ澄まされた梅原猛の感性の底に、梅原自身の怨念があるのではないかと思った。それは戦争と戦争後遺症である。彼は運動神経が鈍く軍事教練や軍隊に適応できず、地獄の思いをした。また空襲体験の中でおびたしい無意味な死を目撃した。こうした理不尽な戦争に導いた天皇教に対して梅原は強い怨念を抱いているのである。

また戦後、その独創性ゆえに戦争に深入りした京都学派の挫折をうけて、西洋哲学の注釈学に大阪哲学学校通信 No.30

墮落した大学の哲学や権威主義的な思想界にも、怨念を抱いていた。

しかし怨念といえば梅原猛の生母千代の怨念があるのではないか。生後一年あまりの子供を遺して死ななければならない母の哀しみがある。この世に思いを遺して死ぬのだからさぞかし怨めしいことだっただろう。梅原は生母の怨念をも背負っていたのではないか、これが彼の怨霊アンテナを鋭くしているのだ。

そしていよいよ『湖の伝説—画家三橋節子の愛と死—』（新潮社、一九七七年）である。三橋節子は幼子を二人この世に遺して死ななければならない母の哀しみを絵に遺した。梅原はこの書を生母への哀悼をこめて書き始めたのではない。何と著者梅原は一言も生母千代に触れていないだけではなく、生母千代に関して連想することに対して明らかに無意識の抑圧が働いている様子がうかがえるのである。とすると以前の聖徳太子や柿本人麿の怨霊論において、生母千代の怨念は自覚されないで無意識に機能していたことになるのだ。

さすがに書いていく過程で生母千代への氾濫のような還帰が起こった。彼は急に生誕の秘密を含め、生母の悲劇を語り始めた。母なる東北の地に赴き、そこに日本の原郷を見る。そして蝦夷とアイヌとの関連を探るために北海道のアイヌ文化を研究し、ついにこの世とあの世の往還を語るアイヌの宗教に出会い、はげしく感動するのである。私は彼が生母をこの世に取り戻したい気持があって、往還思想に感動しているのだと受け止めた。

これを踏まえて、親鸞の「二種回向」説の再評価が生じる。これも往還思想の一種である。「大いなる生命の循環と共生」の思想も、母なる生命の根源への想いが膨らんで、母なる森、生命の涙の海というものがあり、母への想いが昇華されているのだと思う。そのことに気づいて私は、これは是非とも梅原論を書いて世に問わなければならないと切実に思った。最も始原的な

母への想いがもっとも普遍的なしかも現代最重要な思想に昇華されている。これほど胸を打つことがあろうかと思ったのである。

ところが、それはいけない、それは梅原猛をマザコン人間にしてしまう。彼の人生を誕生の秘密に還元して、彼の人生の様々な苦悩や戦いを無にしてしまうことだという議論が起ったのである。それはとんでもない誤解だ。生母千代の哀しみが梅原猛の人生を決定づけたということは、自らの背負った哀しみの根源を見据え、大いなる生命へと還帰することである。そうしてこそ、彼は現実の様々な矛盾と格闘し、苦悩することが出来たのだ。

梅原猛をその生母千代への哀しみから捉えることは正当なのだ。それを示してくれたのが『法然の哀しみ』（小学館、二〇〇〇年）である。梅

原は、法然の「専修念仏」という大宗教改革運動を、彼の両親への思いに凝縮して捉え返している。法然の父は押領使で無惨にも夜討にあつて両親共々殺されてしまった。その修羅に生きた両親を救う教えとは何か、それは念仏を唱えるだけで救われるという専修念仏しかなかったのである。その教えは当時の貴族から庶民まで熱狂的に受け容れられたが、それは既成の仏教教団、寺院、僧侶、經典、修行をすべて無に帰してしまう既成仏教への挑戦であったのだ。法然は自分の両親への想いに無意識的に執着していたために、「南無阿弥陀仏」の連呼に仏教を還元してしまったのである。だから法然の両親への哀しみに還元させてこそ念仏宗の革命的な意義が鮮明となるのだ。同じ方法で梅原猛を捉えるべきではないだろうか。

お 知 ら せ

○会員関係書籍の著者割引頒布○

山本晴義『対話・現代アメリカの社会思想』

ミネルヴァ書房、2003年10月刊、定価2800円(+税)を税込2500円

田畑 稔『マルクスと哲学』

新泉社、2004年5月刊、定価4500円(+税)を税込4000円

高橋準二『科学知と人間理解』

新泉社、2002年9月刊行、定価2300円(+税)を税込2000円

森 信成（解説・山本晴義）『唯物論哲学入門』

新泉社、2004年2月刊行、定価1800円(+税)を税込1600円

○大阪哲学学校催しの録音 CD-ROM ○

哲学学校の催しの録音を、個人の学習のために希望される方に、ウィンドウズ・メディア・プレイヤーで聴ける CD-ROM をお貸しします。費用は実費として五百円を基本とします（関係資料とも）。なお、貸出対象は原則として会員に限らせていただきます。会員登録は随時受け付けています。

●申し込み・問い合わせは催し受付または kihou-ha@xpost.plala.or.jp まで

唐代留学生の墓誌の発見について

藤田 友治（会員）

このほど中国の西安市で見つかった唐代の日本人留学生墓誌は重大な情報をもたらした。従来、「国号日本」と書かれた最古のものは、8世紀半ばの役人の報告書でしかなかった。同時代の生の史料が見つかったのは初めてである。第一級の金石史料といえよう。唐代の日本人の墓誌の人物は唐・玄宗時代の開元年間に唐へ渡った日本人留学生と考えられている。墓誌の主「井府君」は姓が「井」、字（あざな）が「真成」、国籍が日本であったことが分かる。発表によると、西北大学の博物館が最近収蔵した墓誌は、ほぼ正方形の石製（一辺約39.5センチ）である。

最近、中国で日本のサッカーチームにたいし、異常なブーイングが起こつたり、今度の発表をした西北大は昨年、文化祭で日本人留学生の出し物が批判され、留学生たちが襲われた大学であるのは、記憶に新しい。あたかも、「古代の友好の歴史を鑑にしない」と墓誌はいいたいようだ。留学生の「井真成」は、阿倍仲麻呂と同じ717年の船で派遣されたい。仲麻呂も故郷に帰れず、異土に死んだ。彼らは日中交流の原点というべきだろう。さて、留学生の「井真成」とは「井上」「葛井（ふじい）」といった日本姓を持つ渡来系の人物らしいとみられている。しかし、渡来系の「井上忌寸（いみき）」はデータがほとんどない。また、葛井（ふじい）とすると、当時、717年に「井真成」は中国に渡来したと考えられているから、その当時の姓を「葛井」とするなら、おかしい。なぜならば、当時は白猪（しらい）の姓であったからである。白猪史は後、功績により、養老4（720）年5月に「葛井連」と姓を改称したのである。

717年に中国にいたはずの「井真成」は「白猪」と名乗っていたと考えられる。日本の改称後の姓（葛井）は本人にはわからない。認識論の問題である。「白猪」の「い」が「井」の中国風壺字名称に使われたと考えられる。同族の白猪骨（しらいのほね）は「史」（ふひと）で天武天皇13（684）年12月留学して、唐から新羅を経て、筑紫に帰着している。文武天皇4（700）年6月に『大宝律令』の編纂に参加した功績で禄を賜っている（務大壺=むだいいち、正7位上）。白猪はそもそも6世紀後半日本に渡来した、百済系渡来人で、船氏の祖の王辰爾（おうしんに）の甥（兄の子の説もある）。同族から遣唐留学生の白猪骨や、遣新羅大使の葛井広成をはじめ、学問や外交に活躍したものが多い。玄宗帝がその才能を惜しみ、嘆いたことが文面から分かる。墓誌には、(皇帝) その辞に曰く、「□(死) は天の常、遠い(故郷のひとびとは) 君を慈愛している。体は異土(中国)に埋葬されたが、魂は故郷へ帰ることを願っている」と敬意を示した。

「井真成」はどれくらい故郷に帰りたいか、その気持ちを察した玄宗帝の言葉に留学生の不幸を悼み、思い遣る精神が輝く。今日の小泉首相の靖国問題での日中の首脳間の交流の障害と較べ、「歴史をもって鑑とする」墓誌を残してくれたようである。

【14頁より続く】述べたことがあり、基本的に変っていない。埋め草の小論でそれを再論する余白はないが、最近、エーリッヒ・フロムの『破壊—人間性の解剖』（紀伊國屋書店）でほぼ同じ議論がなされているのを読んだ。（2004.10.29）

デュシャン！破壊！破壊！破壊！

高根 英博（会員）

美術不毛の地、大阪にて国立美術館のお披露目でデュシャンの作品がやってくるという。「マルセル・デュシャンと20世紀美術」と題した展覧会だ（11 / 3～12 / 19：国立国際美術館 [中之島] 06-4860-8600）。20世紀アートはこの人のおかげでメチャクチャになったといえる。いわゆる現代美術の到来である。破壊！破壊！破壊！である。ダダやシュールレアリズムを軽くこなし、レディ・メイドやコンセプチュアル・アートという現代美術の極致へと導いた人だ。この人の後にはペンペン草すら生えない。それほどすさまじい、超えようとして超えられない美術界の最重要人物である。美しいとか技巧的に造形がすばらしいとかの発想や美的情念やその求道は古くさいものになってしまった。彼によって、何もつくらなくてもアート、そして何もつくらないことがアートになってしまったのだ。これほど深刻なことはありえないほどの美術の問題が成立してしまっただの。

結局戦後の現代美術もこの人にふりまわされて、彼を超える人はでなかったといえよう（ポップアートやミニマル・アート、コンセプチュアル・アートも出自に彼がいる！）。21世紀になっても美術の状況はかわるようすはない。あいかわらず倦怠と惰性が続いている。あるとすれば、9・11 グランド・ゼロをどう考えるかということくらいか。

例えば、デュシャンの衝撃は、ヨーロッパ史における宗教改革のようなインパクトだろうか。宗教改革以降、キリスト教美術は衰退していく。キリスト教美術と信仰の乖離が起こるのだ。それと同じように美術とか芸術という発想や制度が、現在衰退していつているのだ。芸術の存在

意義、形式と情念そのものの問題が問われ続けられているのだ。デュシャン以降に。

そこで今回、私がデュシャンに匹敵するものと注目している日本人を紹介してみようと思う。まず、江戸時代の博多の仙ガイさんだ。今では禅画の評価は一般化しているが、私が思うに、作品自体はどうみても落書きの域を超えていないのである。出光美術館のコレクションが有名である。これをアートとみるかどうか、私自身もはっきりしない。でもそこがデュシャン的なのだ。まるさんかくしかく、の絵が現代美術のマレーヴィッチに匹敵するか、アンドレ・マルローも驚いたという。でもどうみても落書きなのだ。そう、それがデュシャン的なのだ。

それから柳宗悦もすごいと思っている。彼自身が何かをつくったということではない。美の見方を変えた人だ。後から何年何十年かけてなるほどと世間が納得したのだ。この人がいなかったら現在の美術が退屈なものになっていたろう。まず朝鮮美術の発見者だ。水差しをみて直観するのだ。で、滅び去りかねない朝鮮民具を美術館をつくって展示したのだ。またそこから逆に日本における民芸（民衆芸術）という発想をひらめく。この民芸というのがくせもので、いわゆる現在でいう民芸品と違うのだ。やはり彼の審美眼にかなうものをいうのだ。基本的には骨董的な審美で千利休に近いところがある。千利休も審美の発想はなかなかすごかったのだ。で、民芸の考え方とは、例えば無名であること、オリジナリティはいらないこと、繰り返し早く制作すること、というのだ。これは近代的な芸術作品の制作の考え方をひっくりかえす発想であった。誰がそんな発想で作品がつかれよう。

この転換のラディカルさもデュシャン的といえよう。日本のアートの世界にもデュシャンに負けない人がいるのであって、デュシャンをそんなに怖がってもいけない。

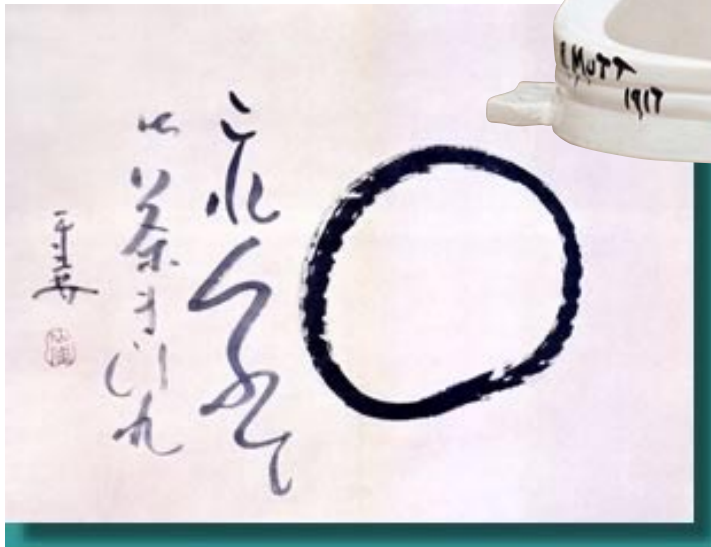
大阪を美術不毛の地といったが、不毛の地ゆ

えにデュシャンはやはり似合うのだ。また「具体」という大きな活動も存在したのも奇跡というしかないがこの関西である（ほとんど関西人はそんなことは知らないが）。とにかく悪魔のようなデュシャンがやって来る！

マルセル・デュシャン『泉』1917/1964年

Succession Marcel Duchamp/ADAGP, Paris&JVACS, Tokyo, 2004

Photo by Fukunaga Kazuo



仙がい義梵（1750～1837）
円相図

運動誌・研究誌

◆哲学学校の会員や参加者の中には、それぞれの関心からさまざまな市民運動や研究会に参加・運営をしておられる方がいます。そうした方々が、お書きになった文章や活動紹介を兼ねて出版物などを送ってくださいます。最近はそのようなものをいただきました。会員交流の一助としてご紹介いたします。（※各連絡先を知りたい方は哲学学校事務局までお問い合わせ下さい）

- 『ニュース・アソシエーティブ』第218号（2004.10.10）、経済研究会発行
「世界石油戦争と地球温暖化」「経済教室10月 原油高騰と世界経済」ほか
- 『季報・唯物論研究』第89号、『季報唯研』刊行会発行 特集「現代アメリカ思想のプリズム」
山本晴義、小澤卓也、木村倫幸、木村勲、大野光彦、藤田友治、やすいゆたか、ほか執筆
- 道路公害から生活をまもる『みちしるべ』第30号、阪神間道路問題ネットワーク発行
「雑感・この道をゆこう」（砂場徹…哲学学校会員）ほか

鍊金術

上野山 定由（参加者）

網のなかで 魚は跳ねていて

水は ざあっと網目から こぼれるのを 何時も見ていた

ある時 水のこぼれない網を 作ってみようと思いつき

網目を細かく細かく

布地より 目のつんだものを 作りあげた

水の分子よりも 細かくしなかつたので

掬いあげた水は 滲むようにして

いつのまにか 漏れてしまった

網目を透かして 向こうが見えなければ 網とはいえない

粗い網目であつても 水がこぼれないものを 作りたい

くる日も くる日も 試行錯誤をくりかえして来た

網一杯に湛えられた水が

揺れながら ダイヤのように 燦然と輝いていないか

大阪哲学学校活動日誌（「通信」29号発行以降）

2004. 7.24.「大阪哲学学校通信」第29号発行

7.24.「ソ連崩壊後のマルクス」（3）

「マルクス唯物論を読み直す」……………講師・田畑 稔

田畑 稔『マルクスと哲学』（新泉社刊）出版祝賀会

8.28. 2004年度夏期合宿（季報刊行会・大阪唯研哲学部会と共催）

～ 29. 報告1「上からのブルジョア革命と明治維新」……………大藪龍介

報告2「現在のマスコミ状況」……………中川健一

報告3「日の丸・心のノート・教育基本法改正について」……………中村 徹

交流会／伊元勇の早朝ヨガ教室ほか

9.18. 「次代を拓く女たちの歩み——参画と変革」……………講師・伍賀借子

10.16. 「今、辻元清美さんに聴く 日本社会をどう変えるか

——これまでの歩みとあらたな出発」……………講師・辻元清美

エッセイ 〈食の安全〉

今、我々の卵の一考察——カイコ棚のニワトリについて

松尾 猛省（会員）

朝日新聞に梅原猛氏の「反時代的密語」が毎月一回掲載され愛読している。先般、<ムツゴロウは復讐する>を読んだ、氏は諫早湾の干拓が農地造成にも、洪水防止にも役立たず、唯、ゼネコンを潤わせ、そのおこぼれを地方に、また、そのリポートを政党や政治家個人に還元するだけのものと、まことに歯切れよく述べられていた。

その背後の、自然破壊と、海苔の取れなくなった海の漁業組合の反対運動、また、残忍きわまる大量の生物ムツゴロウの殺害をみて、傍観できず、狂言、「ムツゴロウ」を創作、上演された。その根底には仏教徒としての、殺生戒も註釈、人間は生物や、動物を殺さずには生きてはいけないが、無用の殺生は厳しく諫める釈迦のおしえも示唆されている。

狂牛病の BSE 問題から鳥インフルエンザと今、食の不安が世界的にも問題となり、日本でも京都府丹波町で発生した鳥インフルエンザの莫大な被害は企業の倒産にまで追い込んだことは、周知のことである。

曾っての我々の過去、いや先史において考えられなかったことが、今日に至り、続出するにいたっている。次にはまた何が起きるやも分からぬ、不透明な時代に我々は生きていることを認識せざるを得ない。

そのおおりか、夏ごろの『論座』で「食への不安と感染症」を特集していた。それを読んで考えさせられるのは、BSE の牛といい、鳥インフルエンザの鶏にしても、その病原性が起きるべきして、発生している今の利益優先、その効率主義と、生き物であることをなおざりにした、

そのつけの結果の現れでないのかという問いかけが、つきまとい頭から離れない。

<まず、BSE や鳥インフルエンザが何故世界に蔓延するようになったのか。農業生産の現場で効率性を求めるあまり、食の安全が置き去りにされた結果ではないだろうか。

BSE 感染の原因は、屠畜して牛肉をそぎとった後の骨や内臓など碎いて乾燥した肉骨粉である。カルシウムやカロリーが高いので、乳牛に与えるとお乳の良くなる。

酪農経営の効率を上げるには、欠かせない飼料だった。

一方の鳥インフルエンザは、大規模養鶏場で健康体とはいえないニワトリに、ウイルスがたやすく取り付いた。タマゴを生むニワトリこそ生きた動物だが、彼らに地面を踏ませずカイコ棚のような棚に押し込める鶏舎は、給餌も採卵も自動化され、まるで工場である。——村田泰雄・朝日編集委員>

TVで我々がときに眼にする今のニワトリ小屋のありさまは、自分の身がやつと横になるか否かの狭いスペースに閉じ込められ、餌を求める鳥たちの争奪の喧騒を目撃する。それを目にしながら、私はふともう何年になるのか、あの今は亡き中村九一郎氏（大経大）が三十数年前、職場の労組が招いた会場での講演で、その時に既にニワトリの生産様式の矛盾を示唆されていた。

カイコ棚に閉じ込め、電気を消して一日二回のタマゴを生むシステムを初めて聞かされ、私は驚愕、啞然としたが、中村氏が何故その話をといえば、その頃アフリカに猛威を奮い、黒人

たちの圧制、そのアパルトヘイトへの激しい抗議の話のあとに、そのニワトリの話しになつていた。

氏は既にその頃に、ニワトリの置かれている生産様式の矛盾を指摘されていたのである。

ところで、山下惣一氏(作家、農業)もまた同様に農業の経済的効率追求、競争激化、命の産業化が原因とみるなかに、ホルスタインの乳牛の化け物じみたミルクタンクを指摘、品種改良のせいで、乳牛が立ち上がる時、自分の乳首を踏みつける事故が多いという。効率化優先の栄養補給の過剰の結果、牛の天寿は二十年だが、普通、三産(二、七歳)ぐらいで搾り取られ、骨と皮になり「老廃牛」として処理されるという。乳量や脂肪率を低くして地元の草資源で飼う酪農にもどすべきだという意見もあるが、もう戻れないという。ハイオクタンのガソリンでしか走れない高級車に、粗悪燃料を給油する如く、牛はたちまちにして、へたり込むというのだ。現在の酪農はそこまで来ていると示唆している。ニワトリの現状はどうか。最新式の鶏舎はウィンドレス、窓のない鶏舎で、外観と遮断された中でのケージ飼いで、鶏の天寿は十年だが二年で淘汰、卵から孵った雛たちは、太陽の光や、自然の風にあたることも、土をあさり、ミミズを探すこともなく一生を終える。

わたしが驚いたのは、山下氏の次のくだりである。

三年前の秋、養鶏農家の友人から娘盛りの「廃鶏」を六羽貰い受け、つぶして食べるつもりで、庭に囲いを造り放した、自由の身になってさぞ歓喜するだろうと思ひしや、爪が異常に発達して、土の上を歩けない、逃げることも、飛ぶことも知らず、ただじっと佇むことしか知らなかった。山下氏は、不気味でとても食する気になれず、直ちに殺して畑に埋めたという。

なんとも、おぞましい話で、これが紛れもない効率主義に慣らされた現在のニワトリの生態であり、実体である。

生まれてこのかた、陽の目も、土のありかも知らずに、蛍光灯の管理のもとにベルトコンベア式に回収されるタマゴではあるが、その卵に私が幼少時の田舎での鶏舎で産み落とした鶏の卵の、あのふくよかな殻の肌さわりや、その生卵を吸った時のけるようなあの黄味のあじの美味や舌触りからは、はるかに遠く、いまや昔の夢物語となった。

そのタマゴについては、いつかの朝日の紙面で養鶏農家のある青年の寄稿を読んで久しく、

今のタマゴの質量ともに栄養素のとぼしく、黄味も薄れ、形骸化の実情を指摘していたことを記憶するが、また、生で吸うことの危険性も示唆していたように思える。

何にしろ、我々は今日否が応でもその卵を消費せざるを得ないのであるが、顧みてタマゴの値段が昔から低価額で推移してきていることは、消費者にとりありがたいといえはありがたいが、その効率主義が背景にあるとはいえ、その生き物としての環境や生態の配慮なしに、非人間的な効率主義を貫くのは、このあたりで謙虚に反省の時期に来ているのではと私は思う。

その鶏が陽の目も見ず、土さえ踏むことのないいわば奇形児的存在の鶏の生む卵が果たして、タマゴといえるかどうか、甚だ怪しく思えるようになって来た。

まずは、鶏をカイコ棚から陽の目のあたる大地に戻してやることだ。すべてがそこから始めなければ、いけないのではと私は思う。そうでない限り、病原菌に犯されやすく、抵抗力のない鳥たちがまた、鳥インフルエンザの危惧からの保障も、開放もない。

それで、タマゴの価額が多少なりとも跳ね上がったとしても、消費者は現在の卵とは名ばかりの薄気味わるい形骸化された卵を食べさせられるよりも、あの昔のした生きのよいタマゴのほうを好み、選ぶのではないかと思うからである。

山下惣一氏の「オッパイお化けの乳牛をみればー」の散文に衝撃をうけて以来、あれこれ考

えるうちに私の思い達したものである。
梅原猛氏も冒頭の文の末尾に「ムツゴロウは必ず復習すると思う。わずか六十万年前に発生して、今や驕り高ぶっている人間が減びるのはそんなに遠いことではあるまい」と締めくくり、それが何万年後かにムツゴロウ

の運命が人間の運命になるやもとの警告であるが、地球上の生きとし生ける生物の共存を人間の一方的な功利と都合での裁断は謙虚に自省し、叡智を傾け、地球上の生ある者の、末永い共存の時期に至っているのではないかと考える次第である。

人を殺してはならない理由をめぐる疑問

平等 文博（会員）

夏合宿交流会での参加者順繰りの話の席で、話題に乏しい私は、たまたま読んだばかりの養老孟司『死の壁』の話をした。哲学学校で『バカの壁』を読んで以来の養老本であったが、前作がまだそれなりの面白みもあったのに対して、こちらはずいぶんと出来が悪い。所詮「二匹目のドジョウ」狙いのやっつけ本なのかもしれない。靖国神社の戦犯合祀を、日本の伝統的な共同体のルールになかった死者の遇し方として肯定的に論じているあたりなど、特にひどかった。

もう一つ私がその時に出したのは、「なぜ人を殺してはいけないのか」と題した第一章の議論である。養老さんのあげる「理由」は、「そんなもの、殺したら二度と作れねえよ」(p.22)ということだ。これが果たして「人を殺してはならない理由」になるのか？ 機械などは壊してもまた作れるというのだが、厳密な意味で「同じもの」は、たとえ機械といえども二度と作ることはできない。逆に「同じようなもの」でさえよければ、人間だって作る（産む）ことは可能である。クローニングの技術を使えば、同一の設計図・仕様で作られる機械と同じレベルで「同じ」な人間さえ作れるだろう。私には、それ自体もきわめて曖昧な「作れる」「作れない」というこの区分が、なぜ「人を殺してはいけない」理由になるのか皆目理解できなかったのである。

ところが、その場にいたやすいゆたかさんが、大阪哲学学校通信 No.30

「養老さんの言うことはその通りだ」という趣旨の発言をされた。交流会での話は一人3分の制限があり、その場でそれ以上の議論はできなかったが、やすいさんの発言には疑問が残った。

その後、同じような発言にまたお目にかかることになる。大阪哲学学校のホームページにこのたび会議室が開設され、論客諸氏が連日盛んな議論をしておられる。ときどき訪れて拝読するのだが、高根英博さんが「七人の（死にたい）侍」と題した投稿で、「養老孟司の『死の壁』という本でうまい説明を見つけた。〈なぜ人を殺してはいけないか〉の答えとして、殺すのは簡単、でもそれを逆に戻すことは超複雑なことで、無理であるから、殺すのはダメという説明である。解りやすい説明で賛成である」と書いておられる。「逆に戻せない」つまり「取り返しがつかない」ということだろう。しかし、そもそも「取り返しのつく」ことなどこの世にあるのか。あるいは逆に、人の生命も十分に「取り返しのつく」こと（大義ある戦争や正義の殺人）として費消されてきたのではないのだろうか。

「作る／作れない」「戻せる／戻せない」——こういうことで人を殺してはならぬ理由を論じるというのは、私にはどう考えてもやはり合点のいかぬことである。

私の考えは、以前に本「通信」で「なぜ人を殺すことができるのか」と題して【8頁に続く】

船井幸雄・オープンワールドに参加する

伊元 勇（会員）

嗜んでいるヨーガの本部公認アーチャリヤ（講師）がロサンゼルスより来日し、台風真正面到達の東京・四谷で二日間のイニシエーション・初級セミナーをお手伝いした。そして翌日私は東京・高輪プリンスホテル各会場で前日より行なわれていた、「船井幸雄・オープンワールド」へはじめて参加した。オープンワールド <http://www.fyow.com/> とは何か。まず、主催者の総帥、船井幸雄という名は聞かれたこともあるかも知れない。

1933年大阪生まれ。京都大学農学部農林経済学科卒。経営コンサルタント。日本マネジメント協会理事などを経て、1970年、日本マーケティングセンター（現・船井総研）設立。同社を約300人の経営専門家を擁する日本最大級の経営コンサルタント会社に成長させた。1985年3月 船井総合研究所に社名変更。1988年 経営コンサルタント会社として世界ではじめて株式上場。現在、グループ30余社の総帥。国内外のクライアントは約5000社と、世界トップクラスの規模を誇る経営コンサルタント会社に成長した。特に流通業界、情報関連業界では、「経営指導の神様」として有名で、大手小売業から、大手情報企業、銀行や証券などの金融機関にまで絶大な信頼がある。

これまでの著作は60冊を超え、「経営の神様」と評されている。

なにやらお堅いビジネス一筋のお人のような経歴であるが、実はこだわりのないどんなものでも面白そうなことがあれば進んで好奇心を発揮し、そしてそれをビジネスまで結び付けてし

まう、不思議な人のようである。

今回のオープンワールドのサブタイトルにもなり、船井幸雄会長が近著でも大きくとりあげている「百匹目の猿現象」。もともと、京都大学の霊長類研究所の研究者たちがはじめた、宮崎県串間市の幸島（こうじま）におけるニホンザルの餌付けが発端で、餌付けに成功した1年後のある日、1匹のメスの子猿が川の水でさつま芋を洗って食べこの行動が急速に拡がった。その後、川の水が枯れた年のこと、猿たちは海水で芋を洗って食べるようになった。海水の塩分が芋をおいしく感じさせるのか、この行動もまた、群れのなかの多くの猿に伝播していった。幸島で猿たちが芋洗いをはじめてしばらくしたあるとき、幸島とはなんの関係もない、大分県高崎山の猿たちにも、芋を水で洗って食べる行動が拡がっていることがわかった。これを知ったアメリカのニューエイジ科学者の第一人者、ライアル・ワトソンは、「幸島で芋を洗う猿の数がある臨界値を超えると、その行動は、遠く離れた場所にいる猿たちにも伝わるのではないか」と考えた。これはベストセラー『生命潮流』（日本語版・工作舎1981）で、「百匹目の猿現象」と名づけられ、世にセンセーションを引き起こした。「百匹目」というのは、その臨界値を便宜的に呼んだものである。「形態形成場」の考え方で知られる生化学者、ルパート・シュルドレイクは、この現象を科学的に論じた。「芋洗い」だけではない。あるとき、ある考え方やある行動が、離れた場所で同時多発的にいっきに拡がる現象が見られる。これを、シュルドレイクは、ある行動様式などが「形の間」をつくり、それ

が共鳴することで、社会の構成原理などにも影響が及ぶのだと考えた。そしてそれは1994年に証明された。この「百匹目の猿現象」は、また船井幸雄のいくつかの書籍『百匹目の猿』（サンマーク出版刊）などによっても、日本に広く知られるようになった。

講演は二日間にわたって斯界著名なる人たちが各会場で行なっていたが、私の目的の坂本政道（東大物理学卒業、ソニーにて半導体の開発に従事し、後アメリカ半導体ベンチャー企業にヘッドハンティングされアメリカに移住、臨死体験に興味があったきっかけで、ロバート・モンローの著書に接し、後にバージニア州モンロー研究所 <http://www.monroeinstitute.org/>）での音響工学によるプログラムを体験する。昼間帰宅してきた息子の身体が自分を通り抜けるという劇的な経験を持っている。http://www.geocities.co.jp/Technopolis-Mars/1869/home_001.htm）と藤崎ちえこ（医学博士。同じくモンロー研究所にて日本人初アウトリーチトレーナー資格取得、昨年より主宰する心の森研究所 <http://cocomori.main.jp/>）からモンロー研究所のプログラムを提供している）である。広いプリンスルーム会場はすでに人であふれていて空いている席などなく、構わず座席を分割している通路の前寄りに座り込んだ。二人の講演者とも著書のまま、ほぼ予想通りの講演内容であったが、堪能なる英語力によって体験してきたモンロー研究所のプログラムは、講演者の人生を決定的に深く意味付けする経験を語らせ、一切の儀式などのない簡単（横になりヘッドホンで音を聞く）で非常に科学的な研修であるにもかかわらず、スピリチュアルな体験（結果的に本人に多様な意味において進歩させる）をさせ、それをさらに理知的に平明に淡々と説明していることの凄さを改めて感じた。

保守的なアメリカ南部のラジオ番組の製作会
大阪哲学学校通信 No.30

社社長であったロバート・モンローは40歳を過ぎてから突然自分の肉体から抜け出て自分の身体を見下ろしている体験をし始める。見たことも聞いたこともなかった全くの未知の経験による根源的な恐怖に戦慄しながらも、自らの身体的社会的健全さを、ごく慎重に確認しつつ、ゆっくりと手探りでその世界のリアリティを確かめながら、その世界での行動範囲を広げていった。やがてさまざまな分野からの多くの科学者との議論の中から、ボランティアによる体外離脱の実験参加へと結びついていき、後にモンロー研究所設立へとなっていった。いろんな条件による繰り返しの実験は興味深い結果も多く生んでいる。実験に理解のある、特定の人物のある指定された時刻に何をしていったか、何かを見たり感じたりしなかったか、検証するようなことが続く。ある時は姪たちと居間で寛ぐ、遠く離れた知り合いの女性のわき腹を証拠とばかりつねり、後日あなただったの、とっても痛かったわ、と赤黒い痣のあとを見せてもらえたこともある。当人しかわからないリアリティーで亡くなった父親に会う経験もしている。そしてさらに驚きの世界が次々と続いていく。

世界次元の多様性とそれに対応する人間の身体が多様性が明らかになっていく。もはや単なる体外離脱というようなキワモノレベルではなくなっていた。そこで出会ういろいろな実体！との遭遇とコミュニケーション。それから相互理解と協力関係！…全く冗談ではない…。しかし、明らかな再現性とリアリティーは、人間（としておこう）の歴史始まって以来の精神世界の構造を垣間見させてくれる。長くこの精神世界に多大な興味を持ち続けてきたこの私でさえ、スムーズに理解していくことに摩擦抵抗があったことを認めないわけにはいかない。

音響工学技術はロバート・モンローだけに開かれていたその扉を、他の人にも広げる役割を果たし、その適合条件を大きく拡大する。やがてこのヘミシンク技術と呼ばれる方法はアメリ

カの特許を取得した。その意義は興味を持つ人々に決して小さくないはずである。やがてこの実験で明らかになったことを、興味を引く一般人たちに体験してもらおうとさまざまなプログラムが生まれ、すでに10年以上約一人ほどの受講者があると推定されている。体験者の多くは人生観が劇的に変わり、死を恐れなくなった人も多いと言われる。受講者同士の体験シェア(分かち合い)する時間が設けられている。きわめて個人的なことも多分にあり、しかし進んで話す人も多いようである。その理由はやはり当人にとってのリアリティの確かさであろう。死んだ親とコミュニケーションが取られれば誰だって驚くに違いない。そしてそれが自らの頭で作った幻想でなく、統計的にそのような経験は非常に多いと聞かされると、人生観は変わらざるを得ないだろう。不思議経験を始める場合も少なからずあるようである。多くの体験者の中から自分なりの分析と意味づけを出版公表する人も出て来ている。そのうち邦訳もある程度なされている。秘匿条件で軍が接触してきたりもしたらしい。仏教の高僧と呼ばれる人やって来て体験後曰く、「アメリカ人やるじゃないか」つまり自分たちが非常に長い間努力してたどり着くその境地に、いとも簡単にたどり着けたその技術に驚いた。あの臨死体験研究で有名なエリザベス・キューブラー・ロス博士も体験したことを公にしている。

全ての受講者が経験することはないそうである。20名ほどの単位で行なわれる(通常最初は5泊6日コースおよそ1800\$前後)が、体験するのがたった一人のこともあるようだ。斯界有名な森田健がそうだった。不思議研究所 <http://www.fushigikenkyujo.com/menu.asp> 最大の障壁は恐怖である。無意識レベルでさえその体験に大きく影響を与える。世界観の放棄は誰だって難しいだろう。こだわりのない心の広さが成功の鍵と言っている。売っているテープやCD

プログラムはあるが(まだ全て英語)、すべて地図!を整備されている。はるか上位の世界探求は今でも続いて行なわれており、一定程度の探求と地図作成などが済めばその世界レベルのプログラムが生まれ、それまでのプログラムを順次体験してきている一般の人が、新しいプログラムを受講することが可能となる。オープンワールド講演で坂本政道はいくつかのレベルを進んでおり、で計11回の受講をしてきたところと言っていた。藤崎ちえこは出たての著書『魂の帰郷』2004 ビジネス社)の中で、小学生の時、友達が体外離脱をして遊んでいる話を聞いて以来、20年もトライし続けたが、モンロー研究所の体験ですぐに初めて体験出来たことを本物技術と確信、日本人初のトレーナの資格を持つに至った経緯を述べている。

このオープンワールド主宰の船井幸雄はこの体験をしたかどうかかわからないが、非常に高く買っている。自らイヤシロチという理想的な場所作りを提唱し本も出版している。しかし実に多彩な人脈を駆使し、今まで考えられなかったキワモノとされる対象を、面白い本物だという自らの体験と確信でもって集め、ビジネスチャンスにまで結び付けている。こういう人物がいる限り日本経済界も捨てたものではなさそうだ。オタクの経済的波及効果は時流に乗っていると言える。

オープンワールドの講演では他に、「不思議な国、神国 日本」と題して、旧約聖書にいう天地創造の意味する日本を、現職銀行頭取が講演したり、「炭は生命を救う」と松林に炭をまき生物にとっての炭の効用を提唱する、森林の会事務局長や、スプーン曲げによるオブジェが有名になった京都の染色補正工芸家、永田純一(出展ブースに居て知らん顔をして「気」の体験をさせてもらった)。ソニーのロボット開発に携わった五味隆志工学博士、著名な教育研究者である

七田眞。「百匹目の猿」の舞台となった辛島で50年猿を見届け来た人、市井の物理学者の特異な研究、ヴェーダの研究、瞑想法、古神道、国連NGOネットワーク代表などなど。

協賛企業等の出店もあり、面白そうなので期待して回ってみた。健康食品、健康グッズ、占い、霊媒、企業の繁栄判断のコンピュータソフト、宗教団体の引き込み、エスニック小物の店、自家出版の絵本売り、スピリチュアルな日本画販売、日本NPO法人による第三諸国の貧しい村での伝統工芸品販売、整体師による無料の背骨調整実演、等等。二千円でオーラ写真を撮るといので撮ってみた。椅子に座り両横に置かれた小さな機械の手形マークに手のひらを密着させる。たぶん高周波を印加しているであろう。ポラロイドフィルムを使用しており、写った上半身のオーラの分析説明が付いていた。複数の霊視者の助言に基づいたアメリカのソフトであるらしい。曰く、頭と身体右側は紫、左側は白で、病気もしくはストレスあるいは深い神秘的経験を経て、世間的に言うところと抽象的である。すること全てが精神的で想像的である。奇跡、魔法、神との一体感を課題にする。サイキック能力があり、試すことを恐れていない。オカルトに興味を持っている。生まれつき治療エネルギーを持って神々しい白い光を導く…。なるほど多少当たっており、過大な持ち上げ方をされるが、魔術師のように必要な物は何の苦もなく手に入れてしまう、というところは全く当たっていないだろう。あなたの人生には静けさと調和と平和が必要である。休養と熟考と瞑想の時間を充分にとらなければならない。毎日の出来事は精神と瞑想の世界に比べたら小さな出来事にしか

過ぎない…。静けさと調和と平和が必要なほど、世間から浮いている人生ということだろうか。…そうかも知れんなあ、と独り言。この手の占いという判断は昔から非常に多くあり、現代的にハイテク機械も使っているが、根本的には別に特別なものではない。ヴィジュアルライズされるとインパクトがあるので大衆向けでよくける。オーラかどうかともかく、ただ写っている何かがあり、ひとによって実にカラフルなものが写るらしい。レインボーカラーなんて面白そう。この写真は事前に聞いていた、見える人の話によれば本物らしい。キルリアン写真をはじめ、最近ではビデオにまで応用されてきている技術は高周波をかけることだ。そして工夫したフィルタでもって可視的にする。問題は写っているものがいったい何なのかが問題である。

世界を相手するはずの思想・哲学者達は一体このエッセーの中身をどう読むのだろう。知らん顔ないし矮小化と冷笑でプライドを満足させるのだろうか。理論の世界は世界の一部であって全てではない。世界が全て説明できるという態度は私には不遜にしか思えない。よって一定程度は議論する価値もあろうと考えているが…。

面白そうなひとの経験をまとまりなく書き散らしたが、おまえはどうなんだ、と言われれば、来月名古屋で体外離脱の初歩の初歩、遠足、と呼ばれる土日2日間コースを予約している。さて体外離脱が出来るかどうか、出来なければ黙っているかな…。とまれ、大阪哲学学校催しと重なれば、平等さんにまた協力できないお詫びせねばならないことは確かである。(2004.10.24)

大阪哲学学校 第10回(2004年度)総会

標記総会を、11月13日(土)午後3時より、尼崎労働福祉会館にて開催します。

会員の方には別途ご案内をいたしますので、ご参加をよろしくお願ひします